

長 沢 鼎 研 究 I

編 者 序

1) 長 沢 鼎

生麦事件ニ随伴シタル文久三年七月ノ英艦ノ鹿兒島砲撃ハ彼我文明ノ進否炳然トシテ此ニ
顕ハレタリ。是ニ於テ薩藩ハ翻然トシテ泰西ニ学フヘキ所アルヲ覺リ之レカ採長補短ハ刻下
ノ急務トナシ先ツ其計画ノ一トシテ元治元年人材ヲ選ヒ以テ泰西ノ学ヲ修メシメンカ為開成
所ヲ創立セリ。長沢鼎ハ其人選ニ入りタル一人ニシテ直ニ同所ニ入学スルコトトナレリ。然
ルニ藩ハ尚之レヲ以テ足レリトセス翌慶応元年亦人材ヲ選抜シテ遠ク海外ニ留学セシムルコ
トトシ同年三月二十日五代友厚、寺島宗則、森有礼、吉田清成、吉原重俊等ニ氏名ヲ変更セ
シメ出發セシメタリ。長沢鼎モ復其一人ニ加ハリ一行中ノ最少年者ナリキ。則チ磯長彦介²⁾ハ
此時藩命ニ依リ長沢鼎ト変更シタルモノナリ。蓋當時幕府ハ外航嚴禁ノ際ナリシヲ以テ薩藩
ノ変名命令止ムヲ得サルニ出タルモノナルヘシ。同年五月二十三日英国ニ着倫敦ニ滞留ニケ
月ノ後蘇格蘭アバーデンニ於テ普通学ヲ修ムルコトトナリタリ。然ルニ慶応三年戊辰ノ戦乱
ニ際シ薩藩ハ其財政上ノ都合ニ依リ曩ニ派遣シタル留学生ハ召喚帰朝セシムルノ止ムヲ得サ
ルニ至レリ。此時偶々米人トーマス・レーキ・ハリス氏所用アリテ英国ニ来レルニ会ス。氏
ハ長沢ノ半途帰朝ノ不利ナルヲ知り自費尚勉学ヲ繼續セシムルニ決シ夏期伴フテ米国ニ渡リ
紐育州ブロクトンニ於テ同居ス。是レヨリ長沢ハハリス氏ニ師事シ哲学研究ノ傍園芸畜産
等ノ学ヲ兼修スルコトトセリ。

明治八年二月ハリス氏ト共ニ加州サンタローサヲ視察シ其風土ノ極メテ農事ニ適応セルヲ
知り同氏ト共同シテ農園ヲ開拓シ以テ農業ニ関スル諸般ノ事業ヲ經營シツツアル際明治四十
年ハリス氏歿シ爾來同農園ノ經營ハ全然長沢鼎単独ノ双肩ニ懸リ來リ銳意事業ノ發達ヲ図リ
ツツ今日ニ至ル。而シテ同農園ノ面積ハ二千エーカーニシテ年々内外人ノ傭聘増加シ本邦人
ノ如キ常ニ数十名ヲ使傭セリ。尚同園ノ主要部分ニ葡萄ヲ栽培シ併セテ葡萄酒ノ醸造ニ従事
シ之レカ販路ハ主ニ欧州各国ヲ花客トセルカ如シ。同農園ノ經營ハ其学理ト多年ノ実験ニ好
成績ヲ顕ハシ今ヤ同人ハ加州ニ於ケル葡萄ノ權威トシテ彼国ノ推重スル所トナリ加州大学教
授等ノ來リテ教ヲ請フモノ頗ル多ク又大正三年桑港ニ開カレタルパナマ太平洋博覧会ニハ選
ハレテ其審査ノ任ヲ負ヒ其他加州各郡ノ共進会等ニハ其審査ニ参加セルモノ不尠。又本邦知
名ノ士及留学生等ノ渡米スルモノハ多ク同農園ヲ訪問シ同人ノ厚意ニ依リ諸種ノ便宜ヲ受ケ
タル者モ少シトセス。尚留学生等ノ同農園ニ入り研究ニ従事スルモノ前後既ニ数十人ニ上リ
又本邦ニ種畜種苗等ヲ寄贈シ或ハ其購入ニ斡旋セルコト極メテ多シ。

1) 「大正13年2月8日付大倉喜八郎外47名叙勲関係文書」(国立公文書館保管)中「鹿兒島県士族長沢鼎事績調書・履歴書」より引用。

2) 戸籍名は磯長彦輔。訳文ではこれを用いた。なお磯長を磯永、彦輔を彦助とするものもある。

履 歴 書

本籍 鹿児島県鹿児島市下荒田町五十三番地

族称 鹿児島県土族

旧姓名 磯長彦介

長沢 鼎

嘉永五年二月一日生

年号月日	学業及任叙
文久三年八月	鹿児島湾ニ於テ英国軍艦ト交戦ノ結果薩藩ハ外国語研究ノ開成所設立セラレタルニ依リ直ニ入学
慶応元年三月廿日	藩命ニ依リ姓名ヲ変更シ英国へ留学ノ為県下串木野ノ羽島ヲ出発同年五月二十三日着英蘇格蘭アバーデンニ於テ普通学修業
慶応三年八月	北米合衆国紐育州プロクトンニ於テトーマス・レーキ・ハリス氏ニ就キ哲学修業ノ傍園芸及畜産学ヲ研究ス
明治八年二月	同国加州サンタローサニ於テハリス氏ト共同シテ農園ヲ開始ス
明治四十年	ハリス氏歿後単独ニテ同農園ノ経営ヲ継続シ主トシテ葡萄栽培及葡萄酒醸造ニ従事シ今日ニ至ル

以上は大正12年11月13日、鹿児島県知事小幡豊治が農商務大臣男爵田健治郎宛提出した、「生存功労者表彰ノ義」に関する内申書の写しである。以上の勲功によって長沢は、大正13年（1924）2月11日、勲5等に叙され雙光旭日章を授与されている。

長沢鼎は「葡萄王」と呼ばれ、「馬鈴薯王」ジョージ・島とならんで、カリフォルニア開拓史上、日本移民の双壁をなす人物であった。上に掲げた経歴書は彼に関する重要事項を簡潔に列挙しているが、この細部についてわれわれの関心がむけられ始めたのは、実はごく最近のことである。

本格的研究の嚆矢をなすものは、1963年3月から「日米フォーラム」に掲載された林竹二氏の「森有礼とトマス・レーキ・ハリス——明治維新直前直後における日本人アメリカ留学生に関する調査研究のための覚えがき」かと思う。同氏はその後米英現地に関係資料調査におもむかれ、多数の貴重な資料を入手されて、1964年2月以降再び「日米フォーラム」誌上にその成果を発表されている。これらの資料の中には、長沢研究にとっても決定的な重要性を持つ幾つかの資料が含まれている。

長沢研究の進展に、第2のきっかけを与えたのは、国内的には明治百年、アメリカでは建国200年という時の節目ではなかったかと思う。明治記念について言えば、テレビ・出版ジャーナリズムがいろいろな企画を組み、その中には鹿児島の地元テレビ局による長沢鼎に関するフィルムもあった。世潮としての歴史趣味は次第に低調となったものの、一般の関心の高まりが、地道な研究への刺戟となった波及効果を見逃すことはできまい。アメリカの建国記念も同様な起爆効果を持ったようである。この年報に訳出掲載する Le

Baron 女史による“The Japanese ‘Baron’ of Fountaingrove”は，“in celebration of the Nation’s Bicentennial Year”として Santa Rosa Junior College により企画発刊された 200年シリーズ（The 200 Series）の一冊である。

さて今回の「鹿児島と洋学」は、海外における長沢研究を取上げ、アメリカ人による二つの研究を紹介した。一つは、今も述べた Gaye LeBaron: The Japanese “Baron” of Fountaingrove; a Study of Kanaye Nagasawa and the Japanese Disciples of Thomas Lake Harris (The 200 Series No. 16, Santa Rosa Junior College, 1976) の全訳であり、一つは Terry E. Jones: The Story of Kanaye Nagasawa である。後者は Jones 氏による未公開論文である。

Mrs. LeBaron は Santa Rosa の地方史家であり、同地の新聞 “The Press Democrat” の著名なコラムニストである。訳出した論説については “This paper, the research for which was aided immensely by the discovery of Nagasawa’s diaries and the translation of the Nagasawa biography by Ryo Torliatt of Santa Rosa, is an adaptation of a chapter from a book-length biography of Thomas Lake Harris, entitled *The Wonder Seeker*. —G. L.” と注記されており、著者の最終的興味はハリスにあるわけだが、長沢の名前が表題に掲げられた英文の著作は、日系紙に散見される小論を除けば小冊子とは言え、これが最初のものではないかと思う。特に長沢の精神世界に日記を通じて多少なりとも光をあてた点に、この論述の独自性があり、訳出の意味もここにあると考えている。なお日付などに若干誤りと思われるものがある。明白な誤謬については脚注乃至〔 〕等で事実を示した。

次に Jones 氏は Portland Community College の Instructor である。Lewis and Clark College で M. Ed. を取得し、現在 counseling の専門家であるが、先に Sonoma State College で歴史学をも修めている。この間終始長沢研究を行い、長沢に関する論文で B. A., M. A. を取得した。この年報に掲載するのは、これ等論文に更に加筆し、著書として出版するため準備された論稿の中心部分である。長沢に関する米人による最初の本格的研究といえる。巻末に文献表、年譜を添えたが、特に文献表は今後の長沢研究者にとり貴重なものとなるだろう。

林竹二氏は先述の日米フォーラム掲載論文の巻頭で「…この研究は、日米の協力と、ある程度十分時間をかけた、根気のよい調査研究を必要とする。……特に米国各地における研究者たちとの協力の成立を待望している。」と希望されているが、今回の2論文ともに林氏の如上の論文に触発されるところすこぶる大きかったように見受けられる。今後ともこの種の研究が米国現地の研究者たちの手によって格段の進展を見るよう祈りたい。

(門田 明記)

追記：T. ジョンズ氏の論文につき二、三注記しておきたい。

1. 長沢の生年は、死亡証明書に1853年とあり、ジョンズ氏もそれを採用しているが、戸籍謄本その他日本の公用文書はすべて嘉永5年2月1日（1852年2月20日）になっているので、これに統一した。
2. 文献表中 Kawakatsu, Masayuki : *Kanaye Nagasawa no Jiden* とあるのは、鷺津尺魔「長沢鼎翁伝」をいう。現在この長沢伝の原本はなく、元住友銀行サンフランシスコ支店長であった川勝正之氏の手写本が一冊残されているだけであるが、アメリカの研究者は、川勝氏が鷺津の長沢伝を参考に、その他の資料を取捨して、この手写本を編集したと考え、これを川勝マニユスクリプトと呼んでいる。しかし、手写本序文を日本語原文で見る限り川勝氏が鷺津の長沢伝を忠実に筆写したものと考えの方が正しいように思われる。
3. 最近判明した新事実に照して誤りと思われる箇所はできるだけ訂正した。たとえば鷺津の長沢伝に記されている鍋島直は鍋倉直であり、Nabeshima を Nabekura と訂正した。ただし生存者の記憶にもとづく長沢の叙勲に関する記述などは、全文の修正を要するのでそのままとした。先にも述べたが、総理府賞勲局の記録によれば大正13年（1924年）となっている。
4. 年表はジョンズ氏に編者が協力し作成した。あるいは編者の責任に帰すべき誤謬があるかもしれない。この点付記しておきたい。

（お断り：今回掲載予定であった Terry Jones 氏の論文は、都合により、次号に掲載する。）